

決断の時・知られざる外交官の舞台

## 日米関係の改善に全力を尽くした

# 斎藤 博

駐米大使

外交史家・法学博士

松村正義



【さいとう・ひろし(1886-1939)とその時代】1919年パリ講和会議。1920年国際連盟発足。1921年ワシントン会議。1931年9月満州事変。1932年3月リットン調査団派遣。1933年3月日本の国際連盟脱退。12月斎藤、駐米大使に就任。1936年1月日本のロンドン軍縮条約脱退。12月ワシントン条約失効。1937年7月中戦争。12月12日パネー号事件。翌13日南京占領。1939年2月斎藤死去。1940年9月日独伊三国軍事同盟。1941年12月真珠湾攻撃。

(写真・外務省外交史料館所蔵)

「理

解ト同情ヲ以テ日米友好關係ノ為ニ尽力シタ」――。

満州事変後、日米関係が急速に悪化する中で、当時の米国務長官コーデル・ハルがその死を惜しんだ、日本人外交官。米国との友好に尽力し、米国人に最も愛されたのが、斎藤博駐米大使、その人である。

パネー号事件勃発と

3分52秒の全米ラジオ放送

1937年12月12日午後1時半、緊張が高まりつつあった日米関係を震撼させるような大事件が発生する。南京付近の揚子江で、突如現れた日本海軍の航空機が米国砲艦パネー号を襲撃、撃沈したのである。

「NIPPON PLANES BOMB AND SINK U.S. GUNBOAT PANAY」。この重大ニュースが米国に報ぜられる

と、米国民の対日世論は当然に悪化した。一触即発の危険をはらむ重大

事件の発生を知った斎藤駐米大使は、本国からの訓令を待たず、自らの判断と責任で、直ちに米国政府へ深謝の意を表明。さらに、驚愕し興奮する米国民へ、当時の有力なマス・メディアであったラジオの全国中継放送を通じて、3分52秒にわたり、ほとぼしるように語りかけ、陳謝した。

「詫びて済むようなことでありません。が、損害については、お金で解決できる部分があるなら、日本政府はどんな条件にも応じる用意があります。米国政府とも十分に話し合いをするつもりです。日本は米国に比べるとはるかに貧しい国ですが、どのような犠牲を払ってでも、日本政府は今回の事件にお詫びしたいと考えています。そして日本軍が再び問

違ったことをしないよう、政府は陸海軍を厳しく監督するでしょう」

このラジオ放送で、斎藤大使は、石川啄木の「働けど働けどなおわがくらし楽にならざり、じっと手を見る」という短歌まで引用して、日本の貧しさと不慮の事件への理解を訴えたという。それは、彼の鋭い外交感覚と卓越した勇氣、流暢な英語力を発揮したものであった。

もちろん、翌13日には広田弘毅外相から訓令電報が届き、斎藤は即刻國務省へハル國務長官を訪ね、公式に遺憾と陳謝の意を表明した。

### 若き駐米特命全權大使の誕生

斎藤博は、1886年12月24日、新潟市に生まれた。父の祥三郎は外務省の主任翻訳官を務めたほどの人物で、斎藤が後に、外務省でも指折

りの英語通と言われたのも、親譲りの素質があったのかもしれない。

斎藤の外交官としての歩みは、東京帝国大学を卒業した1910年の末、外交官補として米国の首府ワシントンへ初赴任したことに始まる。同地での8年の勤務を経て、1918年に三等書記官としてロンドンの在英大使館に転勤する。それからまもなく、翌年1月に第一次世界大戦終結のためのパリ講和会議が開催されると、全権委員随員を命ぜられてパリに赴き、松岡洋右書記官とともに新聞啓発係を担当した。

ところが同講和会議で、山東半島の返還手順をめぐる日中が激しく対立することになる。日本へ譲渡後、中国へ返還するという日本の主張に対し、中国代表は直接中国へ返還すべきであると強く要求。過激なまで



斎藤の遺骨を護送した巡洋艦アストリア号（写真・外務省外交史料館所蔵）

の対日非難の演説や宣伝活動が行われた。日本全権団は、中国代表らの流暢な英語の熱弁に圧倒され、頼みとする米英仏の代表からも「サイレント・パートナー」と揶揄されたという。西園寺公望全権代表の秘書役であった若き近衛文麿は、その惨憺たる劣勢ぶりを目の当たりにし、これからの外交にはプロパガンダが重要

だと痛感する。そして、同じく外交力強化の必要性を痛感した有田八郎、重光葵、堀内謙介らの若手外交官は、会議開催中のパリで外務省革新運動を開始し、まもなく「外務省革新同志会」を結成していく。斎藤も参加したこの革新運動は、最終的に原敬首相の賛同を得て、1921年に情報部が創設される。斎藤は、ワシントン会議での徳川家達全権の秘書役、ニューヨーク総領事を経て、1929年、三代目の情報部長に就任した。その後、1932年4月に満州事变への対応として開かれたジュネーヴ国際連盟総会や一般軍縮委員会などの国際会議に参加し経験を重ねた斎藤は、同年8月、在米国大使館参事官として再びワシントンに勤務する。そして駐蘭特命全権公使を経て、1933年12月、49歳という若さで、

駐米特命全権大使に任命された。

このとき日本は、3月に国際連盟へ脱退通告を行ったばかりであり、斎藤は考慮の末、赴任前に満州国の実情を視察した後に、広田弘毅外相から託された米国務長官コーデル・ハル宛ての対米関係調整に関するメッセージを携行して、米国へ赴任したのである。

### 米国軍艦で帰国した遺骨

駐米大使として赴任した斎藤の活動は目覚ましかった。斎藤は、昼夜の別なく国務省当局と折衝するかたわら、同国の政財界人とも親交を結び、外交や経済問題では依頼されるままにしばしば講演を行った。特に米国大統領のF・ルーズベルトとはゴルフやカード遊びを共にするなど、きわめて懇意であったという。

しかし、満州事変に続く日本軍の華北進出やワシントン海軍軍縮条約の廃棄通告（1934年）、第二次ロンドン軍縮海軍会議からの脱退（1936年）、さらには日中戦争の勃発によって、米国の対日感情はますます硬化していく。これを憂いた斎藤は、『Japan's Policies and Purposes（日本の政策と目的）』（1935年）を刊行し、日本の立場や極東の政治・経済をめぐる実情などを説明していった。しかし、その懸命の努力に追い打ちをかけるかのようにパネー号事件が発生したのである。

大胆不敵に日米友好に奔走しながら、書をよくし漢詩も作るという器用さも持ち合わせ、多くの米国人に愛された斎藤であったが、惜しむらくは生来病弱の蒲柳の質であった。それに加えて、日米関係を悪化させ

る事態が次々と襲い、心労がたたり、1938年夏には肺患が急激に悪化し、療養に専念せざるを得なくなってしまう。折しも、近衛文磨首相から宇垣一成外相の後任として要請があったが、健康上、それに応じることができなかった。斎藤の病状悪化を受けた外務省は、大使の任を解いて帰朝命令を発し、後任として堀内謙介外務次官に駐米大使を発令、赴任させた。

1939年2月26日、斎藤は、ワシントン会議で宿泊していた思い出深いホテル・シヨラムで不帰の客となってしまう。享年53歳だった。

米国では、悪化し続ける日米関係の改善に全力を尽くした斎藤大使の死を悼んで、最新鋭巡洋艦アストリア号（艦長リッチモンド・ターナー海軍大佐）で遺骨を日本へ護送する

という、外交儀礼上、異例の好意的な措置に出た。斎藤の遺骨は同年4月17日、横浜港に安着する。

そして外務省では、斎藤の外交上の功績に鑑みて、翌18日に築地の西本願寺で外務省葬をとり行った。それは、小村寿太郎、杉村陽太郎に続く三回目の外務省葬であった。

【参考文献】春山和典『ワシントンの楼の下』（さがみや書店）／本橋正『太平洋戦争をめぐる日米外交と戦後の米ソ対立』学術出版会／海野芳郎『アストリア号の斎藤大使遺骨の護送』（日本国際政治学会編『日米関係のイメージ』）／松村正義『外務省情報部の創設と伊集院初代部長』（国際法学会『国際法外交雑誌』第70巻、第2号）

#### 松村正義 まつむらまさよし

1928年福井県生まれ。東京大学法学部卒。1952年外務省入省。1970年ニューヨーク領事。1975年国際交流基金。1979年法学博士。1985年米国コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。1988年帝京大学教授。2003年日露戦争研究会会長。主な著書に『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究—』（新有堂）、『ボーツマスの道—末松謙澄とヨーロッパの黄禍論—』（原書房）、『新版 国際交流史—近現代日本の広報文化外交と民間交流—』（地人館）、『日露戦争100年—新しい発見を求めて—』（成文社）他、多数。

#### 外務省外交史料館

〒106-0041 東京都港区麻布台1-5-3  
TEL：03-3585-4511  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>